

2012 年 8 月宮古高校とのラグビー部交流

ともしび
共生委員会ニュース

1 号　2014 年 5 月 15 日版

共生委員会ニュース「ともしび」　　スクールモットー「地の塩、世の光」

共生・校外学習委員会は平和や共生に関わる活動、修学旅行などを担当する教員の委員会です。原爆投下の地、長崎を訪れる 2 年生の修学旅行だけでなく、高等部の 3 年間の生活を通じ、同じ社会に共に暮らす様々な人々との関わりに目を向け、平和や共生の問題を考えていきましょう。この共生委員会ニュースでは、様々な経験をする機会を得た生徒や教員の声も他の多くの皆さんへ届けたいと思っています。その経験を共有し、一緒に考えるきっかけとして下さい。

高等部の平和学習

2 年生で訪れる九州への修学旅行を大きな柱として、3 年間を通して各教科の授業でも平和と共生について学び、考えていきます。

3 年間の流れを紹介

1 年生

聖書　福音書の語る平和

国語総合　カプリンスキー氏

英語　Playing the Enemy

2 年生

聖書　平和「シャーローム」

現代文 B　戦争に関するテーマ(内容未定)

日本史 A(現代史)　太平洋戦争、アウシュビッツ収容所

現代社会　日本国憲法第 9 条

英語　Life in a Jar

物理　原子力と核兵器

修学旅行　平和講和、長崎原爆資料館、キリシタン弾圧の歴史

3 年生

聖書　隣人とは何か

現代文　共生に関するテーマ（内容未定）

英語　（内容未定）

その他

学問入門講座「共生と平和」

岩手県立　宮古高校との交流

フィリピン訪問プログラム

平和・共生に関する活動に興味がある人は、声を掛けて下さい。

武藤、相良、藤本、中久木、キャロル、ベリーまで

岩手県宮古高校との交流

Design3
「青学×宮高」



宮古高校との交流のはじまり

東日本大震災後、被災した岩手県宮古市にある宮古高校との交流が続いています。校舎は無事でしたが、グランドは水に浸かり、家を津波で壊された生徒も出ました。

2011 年の震災後、青山学院高等部では宮古高校の生徒会役員を 9 月の文化祭に招待することから交流を始めました。

2012 年にラグビー部、2013 年には野球部が宮古へ赴き、宮古高校の選手と交流試合を行い、また被災地を見学しました。生徒会についても高等部文化祭に招待をし、昨年度は宮古を訪問してボランティア活動をするなど、交流を続けています。



2013 年 8 月野球部宮古高校訪問

2011 年 9 月

「宮古高校生徒から青山学院高等部生徒へのメッセージ」より

どうかこの震災を忘れないでください。誰かが思ってくれること、祈ってくれることが宮古の復興に向けての力になります。そして日本の経験として共有し、これからの災害を防ぐために、乗り越えられるためにはどうしたらよいか、ひいては生きるために何が必要で何が不要なのかともに考えて後世に伝えたいと思うのです。

宮古市山本市長、宮古高校生徒会　高等部を訪問

2014 年 1 月

東日本大震災を覚えて 1 月 15 日に行われた宮古応援チャリティーコンサート（青山学院女子短期大学主催・高等部ブラスバンド部出演）に出席するために本学院に来訪された岩手県宮古市の市長・山本正徳氏が高等部に来校し、生徒会主催の集まりで講演を行いました。市長は宮古市を襲った津波の状況と宮古市の復興計画について、パワーポイントを使って話をされました。高等部の生徒から「こちらにいる高校生として自分達に何ができるでしょうか」との質問が発せられると、「何よりもそういった気持ちを持ち、被災地のことを覚えていてくれることが大事である」と述べられました。

市長の訪問に合わせ、高等部と震災以来スポーツや生徒会同士の交流を重ねてきている岩手県立宮古高校の生徒会執行部の生徒 7 名が引率の先生と共に来校し、市長の講演を聴きました。そして、高等部生徒と懇談の機会を持ちました。両校の生徒会執行部の生徒達は 8 月の宮古訪問以来の再会で、限られた時間でしたが、学校生活のこと、被災地の状況等、様々なことについての情報・意見交換を行いました。



2014 年 1 月　宮古市のキャラクター
サーモンくんとみやこちゃんも来校

高等部ホームページより

パキスタン計画開発革新大臣　高等部を訪問

2013/12/16

昨年 12 月 6 日(金)午後、パキスタンのイクバル計画開発革新大臣が、10 月に来校された駐日アーミル全権大使と共に青山学院高等部を訪問され、授業見学と生徒との懇談の機会を持ちました。

生徒との懇談が終了した後、教室内で行われた新聞社とのインタビューの中で、今後パキスタンが女子の教育に積極的に取り組んでいく方針である旨を述べられていました。



マララさんを知っていますか？

パキスタンのマララ・ユスフザイさん(16)は国連で演説を行い、ノーベル平和賞の候補に上がるなど有名になりました。

2012 年 10 月 9 日、祖国パキスタンで、女子の教育を認めぬイスラム過激派に頭を撃たれて重傷を負いました。09 年 1 月、マララさんはブログにイスラム過激派による女性の人権抑圧を告発する「パキスタン女子学生の日記」を投稿。このことがもととなり命を狙われることになりました。一命をとりとめたマララさんはその後も暴力に屈することなく、訴え続けています。2012 年には国連で教育の重要性を訴える演説を行い、「無学、貧困、テロリズムと闘いましょう。本を手に取り、ペンを握りましょう。それが私たちにとって最も強力な武器なのです」、「教育こそがただ一つの解決策です」と述べています。

『国籍を超えた若者たち』著者　中村柊斗さんを迎えての学年集会　2014 年 2 月 27 日 6 限

修学旅行を終えた 2 年生は、各国の若者が原爆投下に関する朗読劇を上演するまでのエピソードを描いた『国籍を超えた若者たち』を読み、著者の中村柊斗さんのお話しを直接聞く学年集会の機会を得ました。事前に集まった質問を生徒代表から問いかけ、その１つ１つに中村さんからていねいなお答えをいただきました。集会を経て、生徒の考えたことを紹介します。



305　I.K.

全世界の恒久的な平和の実現の一つの大きな壁は認識の違いであることが多大に感ぜられました。世界中には色々な国があって、その中でも色々な人がいる。言葉も違うけれど、その人の根底にある認識や考え方、信条もそれぞれ違う。それらは国単位でも大きく異なるし、個人個人でも大きく異る。ただそれを力によって一つに統一させようとするのはできるかもしれないけれど、絶対に平和を実現させる方法としては正解じゃない・・・。もしかしたらこの問題に対する正解なんてなくて、正しい解決法なんてないのかもしれないけれど、私達はそれを目指していかなければならないのだと思います。

303　H.Y.

今回の講演を聞いて、平和に関しての考え方が変わりました。「国籍を超えた若者たち」の文献を読んだ時、戦争の被害者、加害者でとらえ方が違うということを改めて認識させられました。「原爆は素晴らしかった」という言葉を初めて読んだときは、憎悪の気持ちが湧き上がりました。中等部や高等部でたくさん平和学習をして、原爆を受けた方や、戦争の犠牲になった方の映像などの資料を見た私にとって、その言葉はあまりにも残酷でした。しかし、中国や朝鮮など日本に植民地支配を受けていた人々も同じようにひどい目にあったのだということを思い出させられ、湧き上がった気持ちも収まっていきました。また、朗読劇の時はその言葉を涙目になって読んでいたということを聞いて、少しほっとしたのと、やはり戦争は悲しみしか生まないのだということを強く感じました。戦争について考えるときは広い視野を持つということを踏まえて、皆が平和を目指せたらいいな、と思いました。

食事を共にして・・・

SYD の炊き出しボランティア

62 期旧 HR310　S.T.



カレーライス・豚汁・杏仁豆腐。何処にでもある定番メニュー。僕は作った、けれども家族に作った訳でなく、入居者 340 名、宮城県石巻市向陽仮設団地の人達の昼食を作ったのだ。

公益財団法人 修養団（SYD）という団体が行う青少年仮設住宅訪問（炊き出し）ボランティア。ボランティア部に所属していた僕はチラシをもらい興味を持ったので参加する事を決めた。そして、被災地に行って来た。

初日は福島の方に泊まって、炊き出しの仕込みと打ち合わせを SYD のメンバー全員で行い、翌日の炊き出しに備えた。二日目は炊き出しのチラシを配ってから中央の広場で炊き出した。直接受け取りに来て下さる人も多くいたが、高齢の方もいるのでこちらから食事を配達しに行くこともあった。食事の時に、流された家の中に工場の機具が流れ込み撤去をする時に涙が出たと語ってくれた人がいた。またある人は地震で散らかった一階の整理をしていた身内が津波に流されて行方不明だと話してくれた。二人はこうも言っていた。「みんな無口だったが、こうやって大勢で若い人も集まって話すのもいい、前を向くべきだ」と。この言葉は重みがあった。子ども達とは鬼ごっこやバドミントン、折り紙をして遊んだが異様に無邪気だった事が印象的である。仮設住宅の中の子だけでしか遊ぶ機会がないのである。



SYD の人と遊ぶことが好きらしい。孤独死も起きる高齢層、震災の時に小さかった若年層。それぞれが薄い板のプレハブ小屋に生活をしているというのが仮設住宅だ。もう震災は終わっている？それは大間違いである。



私達は被災地の表面しか見ていない、と僕は知った。本質に目を背けている。ボランティアは上から目線だと言う人もいるがそれは共生が出来ていないのだと思う。ボランティアこそ共生であり、ボランティアを通して学ぶのは僕達で、笑顔とありがとうの言葉で逆に嬉しくなるのも事実だ。物は奪い合うと不足するが分け合うと余剰が生まれる。物だけでなく笑顔も分け合いたい。そう願うばかりだ。